

世界が平和でありますように
写真が伝える大阪大空襲の記憶

古い写真を調べるのはおもしろい。昨年、私の監修で『写真アルバム 大阪市の昭和』（樹林舎）を刊行した。「大大阪」成立からエキスポ70までの世相や時代風俗をはじめ、家族の思い出や街の雑踏が写し出されている。600枚を超える写真の撮影場所や年代の特定は、しんどかったが、楽しい作業であった。

いや楽しいだけではない。厳粛で心に残る写真もあった。一般社団法人日本綿業倶楽部から提供をうけた終戦すぐの写真もそれだ。中央区備後町にある綿業会館の上から船場の街を写したのものや、梅田の闇市の様子が、すべてカラーで撮影されている。焼き尽くされた船場の街は、真昼の明るさのなか人通りがなくて妙にシーンとしているし、現在の大阪駅前ビル付近の闇市では、店舗が突貫工事で建てられている様子も写っている。

最初どこか分からなかったのが、幼い子どもが集まっている表紙の写真である。右側は古い商家、左側は空地だが、大阪大空襲による焼け跡だろう。子どもたちの笑顔が印象的だ。場所が知りたい。そこから写真に秘められたドラマが見えてくるだろう。

謎が解けたのが、本頁下の写真を検討してである。画面中央やや遠方に朝日ビルディングがある。中央の黒い建物は、御堂筋のガスビルらしい。黒く迷彩色に塗られている。画面の東西を横切る通りは、手前から順に瓦町、淡路町となり、南北の道は井池筋である。淡路町の通りを挟んで南側は焼失し、北側は焼け残ったことが分かる。

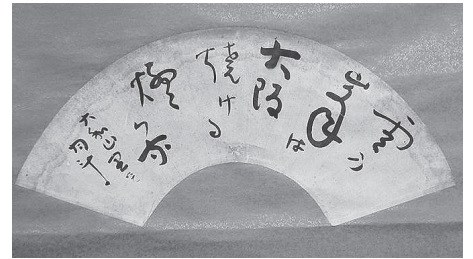
この写真との比較から、子どもたちがいる場所は、ガスビルが写る写真にある焼け跡付近、淡路町の通りであると分かった。子らの背後にある煉瓦造りの建物の窓も、ガスビル手前に位置する建物の窓と一致する。この建物が、明治35(1902)年に日本貯金銀行本店として竣工した、後の大澤商会大阪支店であることも突き止めた。『近代建築画譜』〈1936(昭和11)年〉に



綿業会館から見たガスビル付近。

よると、尖った三角屋根があったはずだが、爆弾に打ち砕かれ焼け落ちたのか、写真では失われている。

ニコニコしているのは、家が残って疎開から帰った淡路町の北側の子たちなのかもしれない。片足を車輪のついた板に乗せて遊ぶキックスケーターをもつ子もいる。では、家を失った南側の子どもたちはどうなったのか。そのことに、はっとさせられた。可愛らしい子らの笑顔にも残酷な運命の明暗を感じさせられる。



青木月斗の扇面(個人蔵)

さらに昭和20(1945)年3月から8月まで続いた大阪大空襲を調べていたところ、俳人 青木月斗(1879~1949)の扇面を見つけた。

雲の峰は大阪焼ける煙かな 大和山里にて

月斗は船場の薬屋に生まれた。正岡子規に認められ、「車百合」「同人」を主宰するなど、大阪で俳諧の指導的役割を果たした。実妹は河東碧梧桐に嫁いでいる。昭和20(1945)年、奈良県大宇陀町に疎開して、終戦後そこで没した。

大阪が大空襲で燃える焔が、奈良からは生駒山を越えて夕焼けのように赤々と見えたという。「雲の峰」は夏の季語で、月斗は戦後も大和山里である宇陀にとどまり、むくむくと湧き起こる入道雲を見上げて「大阪」の「焼ける煙」を思いだしたのだろう。

大阪大空襲からすでに70年以上が経つが、地球上から戦争がなくなったわけではなく、その悲惨さは伝えていかなくてはならない。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像―(創元社)など。